

第45回

インドネシア〈中編〉

Indonesia (Part 2)

植民地支配下の苦難

——340年にわたるオランダの支配

リクルート=スタディサブリ講師 村山 秀太郎

イスラームの浸透と小王国の勃興

15～16世紀のインドネシアでは、海洋貿易の発展と並行してイスラームの浸透が進み、多くのスルタン王国が建国された。15世紀後半に中部ジャワ北海岸にデマックが興り、16世紀中葉にはパジャン王国が中・東部ジャワの覇者となるが、後半にはマタラム王国にその地位を奪われた。西部ジャワの東北端にチルボン王国が、西部ジャワの西北端にはバンテン王国が築かれ、その他にもイスラーム化した多くの小王国が興った。

ポルトガルのマラッカ占領

同じ頃、ヨーロッパの商業勢力もインドネシア諸島に進出してきた。最初に到来したポルトガルは、1510年にインドのゴアに総督府を設置した翌年、マレー半島のマラッカ王国を占領して拠点を築いた。また、スサテンガラ島のティモール、フローレス両島にも影響力を広げ、モルッカ(マルク)諸島の香辛料を巡り、スペインと覇権争いを繰り広げた。



オランダのバタヴィア建設

1602年にユダヤ・マナーを原資にした世界最初の株式会社のオランダ東インド会社(略称VOC)が設立されると、1611年にスンダ・クラバに商館兼要塞を築き、1619年には東インド提督の居城として、バタヴィア(現ジャカルタ)に改称した。同じ頃に進出したイギリスを1623年にモルッカ諸島のアンボイナ(アンボン)事件で排除し、次いでポルトガルやスペインを追いつめて、41年にはマラッカを奪取。以降、オランダは喜望峰から長崎に至る商業網を完成、鎖国日本から朱印船交易を引き継ぎ、中国人をバタヴィアに寄港させながら現インドネシア支配を深めた。1660年代には香辛料のクロブとナツメグの唯一の産地として重要だったモルッカ諸島の覇権を確立し、厳格な生産統制を強いた。ちなみに、現在マルク州アンボンは、キリスト教徒とイスラーム教徒の係争地となっている。ジャワの3王国は、内紛の度にVOC



バタヴィアの絵図 (提供: ㈱インドネシア総合研究所)